

日本独文学会
2011年 春季研究発表会
(Web 発表)

研究発表要旨

発表期間
7月4日(月) 9時 ～ 7月10日(土) 18時

【文学】

アルフレート・デブリーンの小説『ハムレット、長き夜は明ける』 ー「感染する語り手」と語りのポリフォニー

長谷川 純

近代小説の祖といわれるフロベールが作り出した、あたかも外科医のように対象を冷徹に描写する語り手を、M. コペンフェルスは「感染しない語り手」(Immune Erzähler)と名づけた。この語り手は登場人物から距離をとり、読者の登場人物への感情移入を阻害し、「読者を苦しめる語り手」とされる。

このような語り手と対照的に、デブリーンのこの作品で物語るのは、いわば「感染する語り手」ともいうべき語り手である。それは、問いによって読者の内省を促進しながら、登場人物についての共感的理解を喚起し、自らも慨嘆する語り手、ギリシャ悲劇におけるコロスのような語り手である。この語り手は物語の最後に、読者に対して「夜明け」を指し示し、「癒そうとする語り手」であるといえよう。

さて、従来からの形成・発展小説モデルに依拠した解釈では、このような語り手の存在や、作品の一元的解釈からもれこぼれる登場人物の存在（主人公の妹）などを意味づけることが難しかった。本報告では、M. バフチンの理論を援用し、この作品を、相互に還元されない複数の独立した声が響きあう語りのポリフォニーの場として解釈した。このような読み方により、従来解釈の限界を乗り越え、すべての登場人物と語り手まで考慮に入れた作品全体の意味の豊かさ・多様性を汲み取ることが可能になるとと思われる。

F. シラーの Ästhetik と C. ツェレの「二重の美学」

中村 美智太郎

本発表の研究対象は「ツェレのシラー美学論文解釈の検討」である。本発表の目的は、ツェレ (Carsten Zelle) のシラー解釈を検討し、その妥当性と限界を考察することによって、シラーの美学思想を解明しなおすことである。ツェレの解釈方法は「二重の美学」(die doppelte Ästhetik) という表現で定式化されている。この「二重の美学」は、主に近代における「二項の対立」をめぐる思考に対するひとつの定式化である。本発表は、シラーの美学思想にみられる「二項の対立」という

特徴に着目したときに、この二項がシラーの思想全体のなかでどのような役割をもつものなのかという関心に基づくものである。

シラーの美学思想で展開される主張はカントの思考の枠組みに負う部分も多いとの指摘が従来よりなされてきた（例えば Paul de Mann や Terry Eagleton など）。この指摘自体は有効であるが、さらに「二項の対立」という観点からみるなら、シラーの思想のなかで美と崇高の果たす役割と、シラーの思想の構造が明らかになり、シラーの思想により積極的な意義が見出せる。シラーの美学思想については、例えば H. G. ガダマーのように、シラーの思想に批判的な立場もあるが、ツェレの「二重の美学」という観点からのシラー解釈は、そうした批判に対する反論として機能し得る。ツェレのシラー解釈の検討を通じて、シラー思想の位置づけが刷新されるとともに、シラー思想の解釈として新たな側面が提示され得るという意義がある。

フランツ・カフカのアメリカ小説『失踪者』の断章「オクラホマ」と『流刑地にて』におけるシオニズム像

林寄 伸二

長らくフランツ・カフカのアメリカ小説の最終章と見なされてきた断章（プロット版全集では章題は「オクラホマの野外劇場」だった）と植民地物語『流刑地にて』は、これまで同じ視座のもとで論じられることはなかったが、成立はほぼ同時期（1914年10月前半）である。改めてこれらをテキスト生成における隣接関係の中で読み直してみると、A. ホリッチャーのアメリカ見聞録の中の写真の影響などによって結び付けられるモチーフ関連が浮かび上がってくる。中でも見逃しがたいのは、ユダヤ性のモチーフである。というのも、これらの成立時期には、オーストリア＝ハンガリーの対ロシア戦線後退に伴ってガリツィアからプラハに大量に流入した、東方ユダヤ避難民に対するプラハのユダヤ系・シオニスト系組織の救援活動が活発化しており、この事態は同化ユダヤ人カフカに自己とユダヤ性との関わりについて何らかの問いを投げかけたに違いないからだ。

今発表では、カフカのアメリカ小説断章と植民地物語の成立時期の近さ、モチーフの関連、そしてこれらの成立時期におけるカフカのユダヤ人問題に注目して、これまで別々に扱われてきた二つのテキストから読みとれるシオニズム・ユダヤ像を合わせて論じる。それを通じて、いわゆるカフカの「シオニズム期」（Binder）が始まるとされる1914年の時点で、カフカのシオニズムに対する態

度がアンビヴァレントであることを明らかにする。

【ドイツ語教育】

Warum Lesen?

Anette Schilling

An vielen Universitäten in Japan wird Deutsch nur noch als zweite Fremdsprache und oft auch nur noch für ein Jahr unterrichtet, deutsche Sprache und deutsche Literatur oder Kultur selbst sind immer seltener Gegenstand eines Fachstudiums und kaum eine oder einer der studentischen Deutschlerner und -lernerinnen wird je in ein deutschsprachiges Land reisen – und wenn, wird sie oder er dort auch mit Englisch ausreichend zurecht kommen. Andererseits bietet heute vor allem das Internet so einfach, schnell und direkt wie nie zuvor Zugang zu Informationen auf Deutsch über Deutschland, zu deutscher Literatur oder Kultur sowie zu Sach- oder Fachtexten auch ganz anderer Thematik.

Vor diesem Hintergrund ist es an der Zeit, dass das Fach Deutsch als zweite Fremdsprache sich neu orientiert und seine Ziele der aktuellen Situation anpasst.

Der Vortrag möchte als ein mögliches Ziel des universitären Deutschunterrichts die verstärkte Vermittlung von Lesefertigkeit vorschlagen. Lesen ist die wichtigste Technik autonomer Wissensaneignung. Dennoch wird „Lesen“, d.h. die Fertigkeit zum selbständigen Verstehen wesentlicher Textinhalte, kaum gezielt unterrichtet, Lesestrategien sind nur selten Gegenstand gängiger deutscher oder japanischer Deutschlehrwerke. Dabei mangelt es nicht an Forschung zur „Lesekompetenz“ (zuletzt Lutjeharms, Schmidt (2010)), doch deren Umsetzung in die Praxis hat bisher kaum stattgefunden.

【文化・社会】

舞台上の光と闇 ―ロルツィングのオペラ《密猟者》について―

長谷川 悦朗

生涯に十作以上のオペラを完成させたアルベルト・ロルツィング（1801—1851）は、それらの多くで台本作家兼作曲家の役割を担っていた。喜劇オペラ《密猟者》（1842年初演）の台本もやはり彼自身によるものであるが、それはアウグスト・フォン・コツェブー（1761—1819）の喜劇『ノロジカ』（1815年初演）が下敷きになっており、人物間関係や筋展開など多くが踏襲されている。戯曲からオペラへの改作であるからロルツィングの独創性は何よりも音楽面に顕著である一方、台本テキストを原作喜劇と対比することからも新たな視界が開けてくる。原作をロルツィングが改変した要素は少なくないが、その中でも新たに創出された「ビリヤード場面」に注目したい。屋内空間で演じられるこの場面は、偶発的に到来した闇の中で二人の男性が一人の女性に向けて邪な本能的欲望を露呈するが、直後に運び込まれた灯りによって自分達の過誤を認識する滑稽場面である。未開状態にある蒙昧な動物的存在がプロメテウスによってもたらされた火によって人間理性を獲得する神話との照応を指摘することも可能であるが、舞台上に現出する闇は、幕切れ近くまで主要登場人物達が他者の正体や事件の真相を見抜けていない事態を象徴しているという解釈も成り立ちこの場面には筋進行全体が集約されている。さらに、舞台上での光と闇の交錯には劇場照明の歴史的展開における画期的転換が関係していた可能性も勘案しながら考察することが必要になってくるのである。